ざります。癪を發す者もあり、大層騷がしいので、御家來は之れを見たので、早速菅沼軍十郎殿へ此由を申し上げますと、

「汝、噺家の分際で御殿を騷がす不屆な奴、何か謀叛の萠でもある奴ならん、皆の者怪しき噺家を打て、捕れい」（鳴物打込）

大勢の家來の衆が。「泥丹坊堅丸御上意」

と言ふ聲をかけました。相手は武士、此方は噺家、到底敵ふ譯のものではございません。とうどう高手小手に縛られました。此方の柱へ括へ付けられました。

「モシ、決して惡氣があつて爲たのではございません、お腰元の衆が私の顏を見てから、ヤア矮狗が茶を吹いたとか、太神樂の獅子みたいな顏やとか仰つしやつたゆへ、私もツイ虫の居處が惡うございまして、ホンの戯れにベカコをしたのでございます、決して他に惡い事を致したのではございまへん、何卒この繩目を解いて御許しなされて下さいまし」

「馬鹿を申せ、其方噺家として當御殿へ參り、休息のうちに腰元共にベカコを致し騷がせし罪に依つて、今宵は此の所へ縛り置くから左樣に心得ろ、宜いか、明朝鷄が東天紅と鳴いたなれば其方の繩目をば宥してやる。夫れまでは必ずこの繩を解く事は叶はぬ、左樣心得ろ」

「モシ菅沼の旦那樣、モシ軍十郎樣、何卒繩をお解きなされて下さりませ、チエー」

堅丸は括られたまゝ差俯向いて泣出しましたが、其樣な事に頓着ない役人は引取りました。

（三味線地唄、鳥の聲）

「ア、〳〵私は此樣に繩目に掛つて居るが、國に居る母者人や妹は旅で好いお座敷をして貰ひ、錢を儲けて酒でも飲んで、面白う暮して居ると思ふて居るやろう、ヨモヤベカコをして此處で繩目にかゝつて居るとは思ふて居まい、ア、情ない、ベカコをしたばつかりに此の縛めは何事ぞ。

今、菅沼軍十郎樣の仰つしやるには、明早朝鷄が東天紅と鳴いたならば此繩目をば解いてやらうと仰つしやつた。中々夜が明けるまでは餘程の間がある。往昔、唐土の晉の紹王の頃、猛昭君といふ人あり、鷄の物眞似をして函谷關の關の戸を脫けたる例あり、どうも私は鷄の聲色はやうせん。ア、彼の衝立に描いてある鷄は狩野永德の畫きし鷄、コレ鷄や、其方も性根があるなれば、只だ一聲東天紅と鳴いて呉れい」

と申しますと、アラ不思議や衝立に描いてある鷄がスーツと脫けて出ました。

「チエー忝けない、其樣なら今私が言うた事が其方に通じて脫けて呉れたか、ア、忝けない、何卒一聲東天紅と鳴いて呉れやイ」

と申しますと、鷄はバタ〳〵、バタ〳〵、バタ〳〵と鼓翼をして、

「ベカコー」